白雪姫sidestory―鏡と妃の物語

栖里 嘉一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
白雪姫ｓｉｄｅｓｔｏｒｙ―鏡と妃の物語

【Ｎコード】
Ｎ１４６０Ｚ

【作者名】
栖里　嘉一

【あらすじ】
白雪姫の物語が語られるその裏で紡がれる妃と鏡のお話。
４人の妃と４つの鏡。彼らが導き出すのは真実か、それとも――。
※友人の希望で書いたものを改稿して投稿しています。

プロローグ

突然ですが、みなさんは「白雪姫」を知っていますか？
有名なこのお話。

お妃は継母ではなく、白雪姫の実母だった。
王子は実は死体愛好者だった。
白雪姫は妃に復讐をした……なんて、噂もありますね。

いったいどれが真実なのか。その答えは誰も知りません。
もしかしたらそのどれもが本当なのかもしれないと考えたことはありませんか？

ほら、これを見てください。

長い年月を経て、味のある色に変化したこの木箱。
そこには彼らの記録が大切にしまわれています。
実は……木箱自身が見聞きしたことがそこには遺されているのです。
ふふ、何を言っているんだとお思いになりますか？

彼が見守り続けた物語の顛末。お伽の国の住人達の人生の軌跡。
木箱だけが知っている、白雪姫のお話が語り継がれるその裏で、生まれているもう一つの物語たち――ほんのちょっとだけ覗いてみましょう。

第一夜　はじまりの鬼畜鏡さん

白雪姫の母上が亡くなって、新しい女王がお城に来ました。
ところが、この女王は魔女だったのです。
「鏡よ、鏡……世界で一番美しいのはだぁれ？」
「それはお妃さま、貴方でございます」
穏やかな笑みを湛えて忠実に求める答えを出す鏡に上機嫌な女王さま。
彼女はまだ知りません。彼が繰り返すその答えは鏡にとっては何の意味もない言葉だと。

女王は、毎朝鏡に向かって「世界中で一番美しいのは誰」と聞くのが習慣でした。
ところがある日鏡に聞くと、鏡は「それは白雪姫です」と答えたのです。
お妃の機嫌をとるために様々な人間が彼女に褒め称えました。
しかし彼女の怒りは収まりません。
何度聞いても鏡は白雪姫の名前を吐くばかり。
「あの女を始末して！」
女王は怒って、家来に白雪姫を殺してしまうよう命じました。
そうして女王は、鏡に聞いてみると、鏡は「一番美しいのは、白雪姫です」と答えたので、白雪姫が生きていることを知りました。
女王は自ら行動することに決めました。

一方で不機嫌な女王に鏡は顔色一つ変えません。
これまでは誰しもが女王の機嫌を損ねまいとしてきたというのに、鏡だけは女王の思い通りにはなりません。
嫉妬に狂っていく女王の姿を見ても鏡はただその笑顔を崩さすに繰

り返される問に答えるだけでした。

ついに林檎で白雪姫の毒殺に成功した女王は平穏な日々を取り戻したかのように見えました。
しかし彼女に以前のような覇気はなくなっており、その心を占めていたのは他でもない鏡でした。
彼の言葉はただの事実にしか過ぎない、そのことに女王は気づきました。
鏡から名前を告げられる一瞬の喜び、そして訪れるのは空虚な感情でした。
そんなある日、鏡から知らされた女性の存在に女王は半狂乱になってその場に出かけて行きました。
そこで待ち受けるものを彼女が知るはずもありません。
あとには結婚式の招待状と、鏡だけが残されました。
「彼女が踊る姿はさぞ美しいだろうね」
主人がいなくなった後でも、いつもと変わらぬ顔で鏡は微笑みました。

白く細い脚、赤く燃える靴、振り乱される金色の髪。
そして耳を裂く高い声――恐怖に引き攣る顔。
鏡の脳裏には女王の姿がはっきりと浮かび上がっていました。
「この世で一番美しい」
鏡は呟くと、蕩けるような笑みを浮かべました。
それを影から見ていた木箱はその表情に愛さえ感じて眩暈がしました。

――哀れな女。歪んだ鏡に魅せられて。
「美しさに順位をつけるなんて、さ」
木箱の呟きは誰にも届かず空気の中に消えました。

第二夜　ゆーあーまいん。

「なんですって？」
自分の耳を疑いつつ、お妃は鏡を睨みつけた。
「あ、あの、でも僕は！お妃さまのほうがずっと好きです。とっても綺麗だと思ってます！」
鏡の必死の訴えにもお妃は耳を貸さなかった。すでにその頭の中は白雪をどう葬るかで埋め尽くされていた。
「その眩い金色の髪！　透きとおる肌！　吸い込まれそうな青い瞳！！」
「あなた、もっと語彙を増やしたほうがいいわ」
「……！」
「鏡ですからね、お妃さま。勘弁してあげてください」
鏡にしゅんと垂れている耳が見えてくるかのようで、木箱は思わず口をはさんだ。お妃に冷たくあしらわれた鏡はかわいそうなくらい落ち込んでいた。

一週間後、再び訊かれた問いに鏡は恐る恐る答えた。
「あの娘、まだ生きてるの？」
向けられる冷たい視線に鏡は息をのんだ。
「ご、ごめんなさい」
「あなた……苛々させないで」
鏡は怯えたように口を噤んだ。二度の失敗はお妃さま不機嫌にさせていた。

だけど、お妃さまは諦めなかった。

「もちろん！貴女が一番、この世で誰よりも美しいです」
このときを待っていたとばかりに意気込む鏡は自分の頭で思いつく限りの言葉で精一杯お妃を褒め立てた。拙い言葉にも、お妃は白雪姫に勝ったという事実に満足したようだった。久し振りのお妃の笑顔に鏡はぱたぱたとしっぽを振った――ように木箱には見えた。

それからは穏やかな日々が続いていた。
「この世で一番美しいのは誰かしら」
「それは、お妃さまです！」
「……とかなんとかいって、白雪姫が一番美しいって言ったのはどの口かしらね」
元気いっぱいに叫んだ鏡にお妃は意地悪くほほ笑んだ。対する鏡はおろおろとするばかりだ。微笑ましいやりとりに木箱の顔も綻んだ。

そんなある日、お城に一通の招待状が届いた。
それはお妃の目に留まる前に、真実を映し出す鏡の知るところとなった。
「どうしよう……どうするの？　お妃さまが僕のいうこと聞いてくれるとは思えないし……でもこのままじゃ」
「白雪は一度死んだ、王子はそれがよかったみたいだけど。君にならできることがあるんじゃない？　死人はこの世界にいてはいけない。それがこの世の理でしょ」
悩んだ鏡は木箱の言葉についに決心をした。

「ちょっと、あの鏡はどこへやったのよ」

尖るお妃に木箱は素知らぬ顔で応えた。
「さて、どの鏡でございますか」
「あの……あの、お世辞の一つもうまく言えないうるさい鏡よ！」
「白雪のところに送りました。あれの希望ですよ」
平然と言う木箱にお妃は唖然とした。同時に彼女の心にまたどす黒い感情が渦巻いた。
「どういうこと……？」
「貴女のもとにも結婚式の招待状が届いたでしょう。あの鏡は真実を映しにいったのです。安心してください。白雪がいなくなれば貴方が一番美しいのは確実ですよ」
「そういう問題じゃ……！」
「あれの最初で最後の我が儘です。受け入れてやってください」
お妃はへなへなと座り込んだ。そして力なく首を振った。
「そうしたら、私は、どうしたらいいのよ……どう……」
「貴女には新しい鏡をご用意しますよ。でも、もしも」
木箱は妃に手を差し伸べて優しく笑いかけた。
「もしも貴女がどうしてもと言うならあれを取り返してくるのも――それもまたいいかもしれませんね」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1460z/

白雪姫sidestory―鏡と妃の物語

2011年12月7日04時00分発行